

生神女「神を生みたる女」(翻譯)

高田 友

東方正教會(ギリシア正教・ロシア正教)には、カトリック・プロテスタントとは異なる教義あるに注目せらる。本稿は、イエスの御母マリヤに對する正教會信仰を解説したる英文記事を見出したるによりて、微力ながら邦譯仕れる所なり。原文は、インターネットにて、「Mary, mother of God Wikipedia」を検索せられ、そのうちにて、Eastern Orthodox なる項を捜させたまへ。

なほ、「東方正教會」を「ハリストス正教會」と呼稱するあり。「ハリストス」とは「キリスト」の謂ひなり。

東方正教會にては、「永貞童女マリヤ」(Ever-Virgin Mary)すなはち「テオトコス」(生神女 Theotokos 〈希〉／「神を生みたる女」の謂ひ)を讚ふる傳説尠ならず。正教會信徒は、マリヤは「ハリストス」(基督)の生誕以前は言ふに及ばず、その後も生涯處女なりしと信じて已むことなし。一方、「テオトキヤ」(Theotokia)とは「テオトコス」に捧ぐる讚美歌の謂ひなり。カトリックのミサに該るを東方正教會にては「リトゥルギヤ」(liturgy)と稱ふれど、「リトゥルギヤ」の儀禮は「テオトキヤ」を以て始まり、「テオトキヤ」を以て終る。而して、「リトゥルギヤ」に於て「テオトキヤ」の此も重んぜらるるを見れば、正教會にて、「ハリストス」(基督)の次席にあるは「テオトコス」なりとぞ自づから知らるる所なる。正教會の傳統にては、聖人の序列、しかと定まりてあり。まづは「テオトコス」、次で天使、預言者、使徒、教父および殉教者なり。「テオトコス」は天使の上位にあり。これによりて、「天使の女王」(the Lady of the angels)との異名あり。

正教會のマリヤ觀を形成するに當りては、今なほ教會教父の見解、疎かならざる比重を占む。然りと雖も、正教會のマリヤに對する見解は、その理を窮むるにはあらで、大半これを讚美するにとどまる。すなはち讚美歌、頌榮、「リトゥルギヤ」の樂府および「イコ

ン」(聖像) 崇拜に現はるる所なり。讚美歌のうちにて、「ハリストス」、聖人、祭典杯などを讚ふるを「アカシスト」(Akathists)と申すなれど、「アカシスト」の中にて二なく愛でらるるはマリヤに捧げられたる歌にして、さはただに「アカシストの讚美歌」と呼ばるるが常なり。正教會の主たる祭典は十二を數ふるが、其のうち五祭典はマリヤの御爲にあり。正教會の日曜式典にては、「童貞女マリヤ」(The Virgin Mary)の「神の母」(Mother of God)たるを「イコン」崇拜を以て顯彰す。正教會の祭典にも、「テオトコス」の奇蹟の「イコン」を崇むるの段、甚だ多し。

正教會はマリヤを「創造せられたる所有あゆる存在のうちにて最も優れたる者」なれど、神性を具そなへ給ふにはあらず、と定義す。然しか則らば、マリヤに「聖」を附して、「聖マリヤ」(Saint Mary)と呼び奉るは穩當ならず。(譯者註：通常の聖人とは異なるがゆゑに「聖」を冠するは適切ならずとの謂ひならん) 正教會は「無原罪の御宿り」を認定せず、それによりてマリヤを崇拜するの儀はなし。(譯者註：カトリックにては聖母、原罪を負はずして母アンナの胎内に入り給へりとす。すなはち無原罪の御宿りなり。なほ、正教會にては、「聖母」の呼稱なく、「生神女」と呼び奉る) ナジアンゾス(小アジア・カッパドキアの地名)のグレゴリオスは、四世紀コンスタンディノープルの大主教なれど、「イイスス・ハリストス」(耶穌基督)の降誕に觸れて議するに「イイススは乙女によりて懐胎せられたり。乙女はまづは聖神(聖靈 Holy Ghost)によりて身體と靈魂とを淨めらる。淨められたる乙女より出生したるによりて、イイススは神たり。而して一身のうち肉と靈との特性を具そなへ、靈によりて肉は昇華せらる。正教會は被昇天にあらず「生神女就寢祭」を祝ふ。(譯者註：カトリックにては聖母はいまだ生命あるに其の身體天に引き上げられたりとするも、正教會にては、死して後、魂のみ天に昇りたりと爲す。息を引き取り給へるを「就寢」なりとし之を祭日とす)

「イアコブの原福音書」(イアコブは James / カトリックにてはヤコブ)はすなはち聖書外傳の一なるが、正教會マリヤ信仰の原典たり。ここに示されたるマリヤの傳記には、三歳にし

て神殿に在りて乙女たるの聖別を受けたりとの記事掲げらる。司祭長ザカリヤ、マリヤを祝福し、之に告げて曰く、「神、汝の名を末永く世に輝かせ給ひけり」と。ザカリヤはマリヤを祭壇の第三段に据ゑ、茲に於て、神、マリヤに恩寵を賜はる。マリヤ、神殿に逗りて、天使より靈妙の食物を受けて育まれ、十二歳に至るまで傳かる。この時に及びて、天使、ザカリヤに告ぐるに、「マリヤをイスラエルなる鰥夫に嫁がしむべし。いづれの男子なりやは後に示さん」と。この逸話によりて、生神女進堂祭 (Presentation of Mary) の數多の讚美歌のテーマ生じ、かつまた進堂祭の「イコン」は多くこの場面を描寫す。正教會にては、イイス十字架に付けらるるに至るまでの基督教の擴大にマリヤの貢獻する所大なりきと信ず。正教會の神學者セルゲイ・ブルガーコフの著に曰く、「マリヤは使徒教會の中核なり。目に見えざるも實在する中核なり」と。

正教會の傳統を負ふ神學者はマリヤ論マリヤ奉獻に對して貢獻顯著なるものあり。ヨハネ・ダマシシ (John Damascene / c.650 ~ c.750) はかかる神學者の一なりき。世にマリヤにかかはる著述多しといへども、マリヤ被昇天もしくは生神女就寢の眞實を解き起したるの條、またマリヤ神人の間に立ち給ふ仲介の勞を述ぶるの功、此の人の右に出づる者なからん。マリヤは出産に際しても處女性を損なふの儀なかりき。かかる女性の御肉體、死すといへども腐敗を免れずしてあるべしや。また、この人、創造主の孺かりし砌に之を胎内に孚みたまふ。かかる女性、昇天の後も天津御空の高樓に住まひたまはであるべしや。

我儕此の人より命の果實を收穫せり。我儕此の人によりて不死の種子を育つるを得たり。此の人我儕が爲に神人の間に立ち給へり。此の人の中に在りて、神は人と爲り、人は神となれり。

近時、セルゲイ・ブルガーコフは、正教徒のマリヤを思慕するの條、左の如くに縷述するあり。

マリヤは惟ただに信仰の仲立ちたるのみならず、またハリストス受肉の前提なりき。神の子の人性は一重にマリヤに由來す。人の人たる所以を破りたる機械的經緯しを強ひたらましかば、ハリストスも受肉するを得ずしてあらまし。かかる人性、自ら聲を擧げずんば事成り難し。實げに、人のうちにて無二の淨きよき者の口を藉かりてぞ宣のたまひける。曰く、「主しゆの婢はしためを見給へかし。君の仰せらるるが如くに我が身に爲らんことを」と。

(令和三年七月十五日受附)